9 月 10 日のメッセージ

聖書：ガラテヤの信徒への手紙　6：　14 – 18

「十字架のほかに」

同志社大学今出川校地の正門を入ってすぐのところに石碑があります。そこに刻まれている文字は「良心之全身に充満したる丈夫の起り来らん事を」という言葉です。新島襄が同志社の一学生に宛てた手紙の一節から取られたもので、同志社教育のモットーとして、また、建学の精神として今も受け継がれているのです。

この「良心」とは、「道徳的に正邪・善悪を判断する意識」(大辞林)とされます。英語の conscience の訳語として、孟子の言葉から取られたが故に、秩序を重んじる、儒教的なイメージで捉えられることが多いのではないでしょうか。

しかし、conscience の意味はそこに留まりません。「良心的兵役拒否」という言葉に代表されるように、特に宗教的信念をもって社会に挑戦する力をも生み出すものでもあります。

語源となったラテン語の「コンスキエンティア」(共に知ること)の意味通り、神と共に正しいことを知ることで、自らを律しようとすることこそ「良心」なのです。別の言い方をすれば、「人間の欲望を(神の視点から)律するもの」。常に神からの視点をもって生きることが求められているのです。

イエスが、従おうとする群衆に厳しい言葉を投げかけられるのも、この「良心」の有無を問うておられるからでしょう(「もし、だれかがわたしのもとに来るとしても、父、母、妻、子供、兄弟、姉妹を、更に自分の命であろうとも、これを憎まないなら、わたしの弟子ではありえない。」ルカによる福音書 14:26)。

そのことを言い換えて、「自分の十字架を背負ってついて来る者でなければ、だれであれ、わたしの弟子ではありえない。」(ルカによる福音書 14:27)と言われます。

「自分の十字架」と言われると、ものすごく重く、厳しい何かを自分に課していることのように思えます。けれどももし、物理的に何かを棄てなければイエスに従えないとすれば、私たちのうち、一体、何人が従うことができるでしょう。ダビデのように、愛する息子を失わなければ神の御心がわからないとすれば、それはなんと悲しいことでしょう(「ダビデは身を震わせ、城門の上の部屋に上って泣いた。彼は上りながらこう言った。『わたしの息子アブサロムよ、わたしの息子よ。わたしの息子アブサロムよ、わたしがお前に代わって死ねばよかった。アブサロム、わたしの息子よ、わたしの息子よ。』」サムエル記下 19:1)。

パウロが手紙を宛てたガラテヤの教会でも、そのような物理的な問題が弟子たちを分断していました。割礼の有無で、イエスの弟子としての覚悟が違うかのように扱われていたのでした(cf. 「割礼の有無は問題ではなく、大切なのは、新しく創造されることです。」ガラテヤの信徒への手紙 6:15)。

それに対してパウロは、はっきりと否を言います。

「このわたしには、わたしたちの主イエス・キリストの十字架のほかに、誇るものが決してあってはなりません。この十字架によって、世はわたしに対し、わたしは世に対してはりつけにされているのです。」(ガラテヤの信徒への手紙 6:14)

人間的な倫理や規範ではなく、「神と共に知った」(コンスキエンティア)真理に生きることこそが大切なのです。苦しい時、厳しい時に私を救うのは人間的な力ではなく、ただ神の力のみです(「声をあげ、主に向かって叫び／声をあげ、主に向かって憐れみを求めよう。」詩編 142:2)。

自分の力を誇るのではなく、神の助けの中にいる自分を再発見することによってのみ、私たちは救いを実感することができます。

「十字架を背負う」とは、「ただ神と共にのみ生きる」ことです。「十字架を誇る」とは、「神と共に知った良心が、私を律していることに感謝する」ことです。

「良心の全身に充満した」一人として生かされ、生きて参りましょう。

08-09-21